

エルサルバドルとスポーツ

まず初めに、エルサルバドルに青年海外協力隊として行くが決まった時、一体どんな国かさっぱり想像もつかなかった。調べてみると、中米にある小国で治安が悪く、ギャング団が抗争しているとある。「一体どんな危険な目に遭うのか…」と正直楽しみよりも不安でならなかった。しかし、そんな感情とは裏腹に2年3か月エルサルバドルの人々と生活を共にしていくにつれて肩の力は抜け、自分の表情がどんどん柔らかくなっていくのを感じた。毎日道を歩けば笑顔であいさつを交わし、職場ではたわいもないジョークか飛び交い、気持ちを分かち合いたい時にはハグをする。「なんて自然で、気持ちがいいのだろう」と感じた。そして、「ハグ」が現地の人々と最も距離を縮め、コミュニケーションを図る上でとても大切なものだを知った。辛いときや嬉しいとき、感謝、別れなどたくさんの感情を表現する場面で彼らはハグをする。その度に言葉がなくても伝わる思いが、スッと心の痛みを消し、ホッと心を温めてくれる。まさにマジックのような、なんとも言葉には言い表せないあの感情が今でも現地で出会った大切な人たちとの思い出を蘇らせてくれる。



当国ではサッカーが大人気である。実際にやらない人でも、サッカーの話になると時間を忘れて語り合っている。サッカー以外にもスポーツにはとても力を入れており、学生のラテンアメリカ国際大会 (COODICADER) では多種目にわたりメダルを獲得し、ここ数年1位を独占して好成績を収めている。



(画像 google より参照)

さらに障害者スポーツが充実している。エルサルバドルでは、陸上・水泳・パワーリフティング・車いすバスケットボール・ボッチャ・卓球・シッティングバレーボールと様々なパラリンピック競技に力を入れており、2020年の東京に向けて練習に励んでいる。

当時パワーリフティングの選手が2016年のリオに初出場することができたときはみんなで喜んだ。しかし、そこまでの道のりがどれほど大変か日本にいたら想像もつかなかったことだろう。



リオパラリンピックの開会式（画像 google より参照）

私はいくつかの競技の指導者として現地の同僚らと共に練習に携わった。そこで選手が継続してスポーツを行うには経済的に厳しい環境であることを思い知らされた。練習場まで行くための交通費がない。トレーニングをしても十分な水分・栄養を取ることができず、なかなか筋力や体力はつかない。道具や練習する場所もなかなか確保することはできず、ある物、あるスペースを利用して行うしかない。そんな環境の中コーチらは試行錯誤しながら練習メニューを考え指導に努めていた。これらの環境を当国のスポーツ庁やパラリンピック委員会はどうか改善しようと力を尽くしていた。その良くしようとあきらめない気持ちがエルサルバドルをますます強くしているのだと感じる。

コーチらは家から出ることができない障害を持つ人々を訪問し、練習に誘い、気がつけばエルサルバドルでアスリートとして国際大会で賞を取る選手らに育て上げている。





ここでは、スポーツがしたくても様々な事情でできない人々がたくさんいる。しかし、苦しい生活の中でも笑顔でいる。こちらが彼らの行動に勇気づけられることのほうが多かったに違いない。インターネットで調べれば、治安などネガティブな情報が錯綜する中、住んでみないとわからない愛情深く、真面目で元気をもらえる国、エルサルバドル。そして行くまで不安に思っていた危険な目に遭うことも一度もなかった。彼らから得たものは本当に多く、少しでもこのような環境の中で一生懸命一日を生活している人がいるということを日本の教育現場で伝えていけたらと考える。



パラリンピック委員会の仲間

三上り香（みかみ るり香）氏

2015年から2018年まで体育隊員として活動。

現在は高校で体育教師をしながらエルサルバドルの経験談や国際・異文化理解などを生徒や先生方に伝えている。